

第二十六回 関雲長水を放つて七軍を溺れしむ、関雲長骨を刮りて毒を療す

— 名医華佗 —

(前回から今回まで)

龐徳は、関羽と決死の戦いをする覚悟で出陣します。龐徳は関羽と戦場で切り結び、逃げると思せかけて関羽に弓を射ます。その矢が関羽のひじに命中します。ここぞとばかり、龐徳は関羽を追いかけて斬ろうとしますが、総大将の于禁はわざと龐徳を引き返させます。そしてこの後も、龐徳を谷の奥に配置して前線から遠ざけ、彼に手柄をたてさせないようにします。

于禁は出陣前に、龐徳の裏切りの可能性を曹操に告げていたこともあり、もし龐徳が関羽を討ち取りでもすれば、自分の威信がきかなくなると思ったのでしよう。龐徳への対抗心から、彼の活躍を妨げているのです。男の嫉妬とでもいえましようか。ですから、二人力を合わせてという気持ちはなく、足並みが揃いませぬ。

これは『三国志演義』のフィクションですが、この後、于禁は関羽に降伏し、龐徳は降伏を肯ぜずに殺されていますので、二人の対照的な身の処し方への伏線としています。

『三国志演義』は、他にも蜀ぎえんの魏延ようぎと楊儀、魏しやうかいの鍾會とうがいと鄧艾など、味方同士の対抗心から終わりを全まつとうしない人物を登場させています。

この後、于禁は、幕僚ばくりやうたちの進言に耳をかさず、谷あいに駐屯します。そして、これが致命的な敗北の原因になります。ただし、これもフィクションです。このあたりは、史実をかなり歪曲わいきよくして于禁を貶おとしめています。

おりしも秋八月で、はげしい雨が数日ふりつづくと、関羽は船やいかだを用意して、水戦の準備をします。関羽は、于禁が狭い谷間に陣どつたのを見て、襄江じやうかうの水を堰せきとめて一挙に切つて落とし、それに乗じて攻撃しようと計画します。魏の陣営でも水攻めを心配する声があります。于禁は頭からとりあげません。

一方、水攻めの危険を察知した龐徳が、陣地を移そうとしているまさにその時、堰せきとめられた襄江じやうかうの水が一挙に流れ込んできます。

(本文抄)

夜になると風雨がはげしくなった。龐徳ほうとくが陣幕のなかに座っていると、にわかに多数の馬が駆けまわり、攻め太鼓が地をどよもして鳴り響くのが聞こえた。龐徳は驚いて外に出て、

馬に乗ろうとした瞬間、四方八方から洪水が押し寄せて来るではないか。七軍の将兵は右往左往して、波に吞まれて死ぬ者は数えきれないほど。平地の水の深さは一丈余りになり、于禁・龐徳および諸将はそれぞれ小山に登って難を避けた。

明け方になるころ、関羽が諸将は率い、旗をひるがえし軍鼓を打ち鳴らしながら、大船に乗って攻め寄せた。于禁はどこにも逃げ場がなく、左右にわずか五、六十人しかいないのを見て、逃げられないと観念し、降参を申し出た。

関羽は于禁の戦袍や鎧をすべて剥ぎ取り、船に押し込めたうえで、さらに龐徳を生け捕りにしようとした。

このとき、龐徳ならびに董衡・董超・成何、および五百人の歩兵は、全員戦袍も鎧も身につけないまま、土手の上に立っていた。関羽が来たのを見ても、龐徳はまったく恐れるふうもなく、猛然とこれを迎え撃った。関羽が船で四方を包囲すると、関羽軍の兵士はいっせいに矢を放ったので、龐徳軍の兵士の大半が倒れた。

董衡と董超は負けは決まったと見て、龐徳に言うには、「兵士はほとんど死傷し、どこにも逃げ道はありません。投降するより他はありません」

龐徳は激怒し、「私は魏王の恩義を受けた身だ。他人に膝を屈することはできない」と言

うや、その場で董衡と董超を斬り殺し、声を荒げて言った。

「降伏を口にする者は、この二人と同じ目にあうぞ」

かくして配下一同、力をふるって敵を防ぎ、明け方から正午まで戦ったが、士気は増すばかりで衰えそうにない。

関羽が四方の軍勢を促して猛攻を加え、矢や石を雨あられと降らせたのに対し、龐徳は士卒に短兵（刀劍の類）を使つて応戦させた。龐徳は成何を顧みて言った。

「『勇將は死を恐れて助かりたいとは思わず、壯士は節を曲げて生きることを望まない』と聞いている。今日は私の死ぬ日だ。おまえも覚悟を決めて、決死の戦いをしてくれ」

言われた成何が前に進んだところ、関羽の放つた矢に当たり水中に転落した。これを見て、士卒はすべて降伏し、龐徳だけが奮闘していると、荊州軍の数十人が小船に乗つて土手に近づいて来た。龐徳は刀をひっさげ、ひらりと小船に乗り移ると、たちまち十人余りを斬り殺した。残りの者は、船を棄てて川のなかに飛び込み、命からがら逃げたのだった。龐徳は一方の手で刀をひっさげ、もう一方の手で短い棹を操りながら、樊城めざして逃げようとした。そのとき、上流から一人の大將が大きな筏いかたを操りながら、やつて来たかと思うと、龐徳の小船に突き当たつて転覆させたので、龐徳は水中に転落した。その大將は筏の上から水に飛

び込み、龐徳を生け捕りにして、筏の上に引きあげた。その大將は、周倉しゅうそうであつた。

(解説)

降伏した于禁は、関羽の前に引つたてられてくると、命ごいをします。関羽は「おまえを殺すのは大や豚を殺すのと同じだ、刀が汚れる」と言い放ち、牢に捕えおくよう命じます。

続いて龐徳が引つたてられて来ると、関羽は降参するよう勧めますが、龐徳は「降参するくらいなら、殺されたほうがまだ」と関羽を罵り、自ら首をさしだして処刑されます。関羽は彼の忠義をあわれみ、手厚く葬ります。

于禁と龐徳が危険な谷あいに駐屯したというは『三国志演義』のフィクションで、史実から、少し、この間の動きを見ておきたいと思ひます。

于禁と龐徳は樊城の北に別々に駐屯していました。そして八月になると、大雨で漢水が氾濫し、ともに陣地が水没してしまひます。

関羽が襄江じょうかうの水を堰せきとめて、一挙に切つて落としたという事実はありません。

于禁は高地に登つて洪水を避けようとはしますがどこにも行くことができず、進退しんたいきわまつたところに、関羽が大船に乗つて攻めて来たので、力つきて降伏してしまひます。

この時代、降伏して敵方に仕えるということは決して珍しいことではありません。ましてや于禁は、降伏しただけで敵方に立場を変えたわけではありません。しかしこの時、もう一方の龐徳が対照的たいしょうてきな身の処し方をしますので、どうしても降伏という事実が際立ってしまいます。

龐徳は堤に登って関羽の猛攻に応戦し、「今日こそわしの死ぬ日だ」と頑強がんきょうに抵抗します。そして、刀折れ矢尽つききると、小舟に乗って曹仁そうじんのもとへ逃げようとはしますが、濁流だくりゅうに舟が転覆てんぷくして生け捕りにされてしまいます。そして、関羽を睨にらみつけたまま脆ひよこうともせず、「わしは国家の鬼となっても、賊の将とはならぬ」と言い放ち、ついに殺されたのでした。

『三国志演義』は、この龐徳の最後を際立きわたせるため、于禁を矮小化わいしょうかして描いています。于禁が龐徳に手柄をたてさせないようにしたり、谷あいの狭地に駐屯して大敗の因をつくったり、また、関羽に命乞いのちこいをしたりとさまざまなフィクションで描きます。

これは、前にも諸葛亮と周瑜のやり取りで使われた手法で、登場人物を対称化して描くためによくこれを使います。

『三国志演義』の人物描写の特徴は、登場人物を単純化して描くところにあります。関羽は「義」を貫く人、劉備は「仁徳」の思いやりある人という具合に、そこに複雑性はありま

せん。登場人物がどのような性格かをすぐに見分けることができます。関羽のように義を大切にし、劉備のように思いやりを大切にし、曹操のような悪辣あくらつなことは行つてはならないという風に、人々に道義どうぎてき的な影響を与えながら読み継がれてきたのが『三国志演義』です。

曹操は、よもやと思つた于禁が降伏し、龐徳が処刑されたとの知らせを受け、「わしが于禁を知つてから三十年になるが、危機を前にして、龐徳に及ばないとは思ひもよらなかつた」とため息をつきます。勇名を馳せた于禁であっても、思ひもよらぬ一面を見せて曹操を失望させたのです。

極限状況に陥つたとき、人はどう行動するか。それこそ、千差万別の人間模様でしょう。

話は変わりますが、一九八二年一月、歴史的寒波が襲うアメリカ・ワシントンで、旅客機が氷結した川に墜落する事故がありました。救助ヘリコプターが駆けつけ、男性の乗客に命綱いのちづなを渡しましたが、彼は墜落機の残骸ざんがいに引っかかっていたこともあり、ロープを女性乗客に渡します。二度目もスチュワーデスに譲りました。救助ヘリが三度目に戻ってきた時、彼はついに力尽き水中に没したのです。彼にはアメリカ政府からゴールド救命メダルが授与され、その後、事故現場となった橋は、彼の名にちなんで改名されました。これは映像でも残

り、全世界に感動の波紋を広げました。

于禁と龐徳の対比を通し、いざというときの身を処し方の大切さを描きます。

こうして、于禁は生き延びますが、彼の本当の悲劇は、この後に待ち構えていました。

さて、関羽は、いよいよ曹仁が守る樊城はんじょうの攻撃にかかります。しかし、この樊城攻撃中に、関羽は右肘みぎひじに流れ矢をうけます。その矢には毒が塗ってあり、毒はすでに骨まで達していたのです。ここで、伝説の名医華佗かだが登場します。

(本文抄)

諸将は、関羽の傷が治癒ちゆしないため、四方八方に名医を探し求めた。

そこへある日、一人の人物が江東から小舟に乗って、訪ねて来た。関平かんぺいが見ると、その人物は四角い頭巾ずきんにゆったりした衣服を身につけ、腕に青い袋をかけている。彼はみずから、名乗って言った。

「私は沛国譙郡しやう（安徽省亳州市あんき）の出身で、姓を華か、名を佗だ、あざな元化げんかと申します。天下の英雄とうたわれた関將軍が、毒矢に当たられたとうかがい、治療に参上いたしました」
「以前、呉の周泰しゅうたいを治された方ではないですか」と関平。

「そうです」と華佗。

関平は大喜びして、さつそく諸将とともに華佗を連れ、陣幕のなかの関羽に会いに行った。このとき、関羽は肘ひじが痛くてならなかったが、自軍の士気が落ちるのを懸念けんねんし、気をまぎらすべく、馬良と碁ごを指しているところだった。医者が来たと聞くと、関羽はさつそく通させて席に着かせた。

お茶を飲んだあと、華佗が肘を見せてほしいと言うと、関羽は片肌かたはだぬいで、肘をさしだし華佗に診みさせた。

すると、華佗は言った。

「これは鏃やじりの傷で、矢に烏頭うしかぶとの毒が塗ってあったので、それが骨にまでひろがったものです。早く処置しなければ、この肘は使えなくなります」

「どんなふうに治療するのか」と関羽。

「気がかりなのは、君侯が怖こわがられることです」と華佗。

「私は死ぬことも平気なのだから、心配することはない」と、関羽は笑った。

「静かな部屋に柱を一本立て、上に大きな鉄の輪をつけて、それに腕を通していただき、縄なわでくくりつけたあと、布を頭からかぶっていただきます。私はするどい小刀で肉を切り裂き、

骨まで達したところで、鏃やじりの毒を削り取り、薬を塗りつけてから、糸で傷口きずぐちを縫ぬい合わせて、ようやく終わりとなります。いかがですか」と華佗。

「そんなことは簡単だ。柱などを使うまでもない」と関羽は笑い、酒宴の支度をさせて華佗をもてなした。

関羽は数杯飲み干すと、また馬良と碁ごを指しはじめ、肘を伸ばして華佗に切り裂かせた。華佗は鋭い小刀を手にすると、番兵に大きな皿を持って、関羽の肘の血を受けるようにいつけた。

華佗が「では始めますが、どうか驚かれませんか」と言うと、「きみの治療にまかせろ。私は世間の凡人ぼんじんどものように、怖がったり痛がったりはしない」と関羽。

そこで華佗は刀を動かして、肉を切り裂き、骨をむき出しにすると、骨はずでに青く変色していた。華佗がガリツガリツと音をたてて骨を削けずりはじめると、その場にいた者はみな真っ青になって顔をおおった。しかし、関羽は酒を飲み肉を食らい、談笑しながら碁を指しつづけ、まったく苦痛の色を見せなかった。

あつというまに、血は皿いっぱいになった。華佗は毒をすっかり削り取り、薬を塗りつけ糸で縫ぬいあわせると、関羽はからからと笑いながら、諸将に向かって言った。

「この肘はもとどおり伸びるようになり、痛みも消えた。先生はまことの名医だ」
「私はこれまで長らく医者をして来ましたが、將軍のようなお方ははじめてです。まことに神様でいらつしやいます」と華佗。

(解説)

華佗は、『三国志』や『後漢書』にも記載がある実在の名医です。

『三国志演義』では、フィクションながらしばしば登場して、武将たちの治療にあたっています。そして、この場面でも華佗が登場して、その名医ぶりをいかんなく發揮します。

華佗は自分から関羽の治療にやってきます。そして、トリカブトの毒が骨にしみ込んでいたので、ただちに骨から毒を削り落とさねばならない、しかし、この手術は激痛をともなうので、腕を柱にくくりつけてやると言います。

しかし豪胆な関羽は、腕をしばらくそのまま切開せよといいます。そして手術中、ふだんと変わりなく、平然と酒を飲み碁をうちながら談笑して、今までこんな人は初めてだと華佗を驚かせます。名医華佗のおかげで、関羽の臂ひじももとどおり動くようになります。

千八百年前に外科手術を行なったといわれる、名医華佗が登場する名場面です。